



ライティング・テスト 作成の心得

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. ライティング力を見る観点

今の日本の中学校で求められているライティング力とは何であろうか。この学習段階では、英語のライティングの最も基本的な部分が評価対象となるだろう。したがって、ここには、英語の文字や単語を書く力、文を書く力などが含まれると考えられる。ただし、ここに複数のパラグラフを書く力までが含まれるかどうかは、生徒の実態や設定目標によっても違って来るかもしれない。

入門期のライティングにおいては、文字・単語・文のレベルでの「正確さ」が重視されるのは当然であるが、ある程度学習が進んだならば、「書く量」に目を向けることも重要になるだろう。英語教育では、「正確さ」と「流暢さ」がしばしば重要な概念として挙げられるが、ライティング・テストにおいては「すらすら書いている様子」が見られるわけではないので、結局ある時間内にどれだけ書けているかが、「流暢さ」の間接的な指標になる。もし「正確さ」だけがいつも評価対象となり、この「量」の方が全く評価対象となっていないとすれば、ある意味で、構成概念妥当性に欠ける（本来測るべき能力を測っていない）ということになるかもしれない。

2. 和文英訳偏重の影響

中学校の英語の定期試験問題を見てみると、ライティング・テストのレパートリーがきわめて限られていることがわかる。これまでに収集した定期試験を見ると、おおよそ8～9割が和文英訳で、残りが「～について書け」式のいわゆる自由作文である。

和文英訳への偏重が学習にもたらす波及効果を考えてみよう。和文英訳では、書く内容が与えられて

いるので、「何を書くか」や「文章構成」は問題とならない。また、内容が規定されているので、書く長さもほとんど規定されていると言える。もちろん、正確さが重要視される入門期では、正確に書く力を見るための和文英訳テストは便利な手法かもしれない。しかし、これほど圧倒的に和文英訳テストに偏ることによって、正確さと同様に重要な「たくさん書く力」や「何を書くかを考える力」などはないがしろにされている可能性がある。ライティング・テストが和文英訳となっているせいで、指導や学習においても、どれだけたくさん書けるかや何を書くかを考えるプロセスはなくなってしまっている。

3. ライティング・テストのレパートリー

どのようなテスト・テクニックでもそうだが、レパートリーが偏れば、テストで見えてくる能力も偏ったものになる。また、レパートリーが少なければ、見ようとする能力と出題方法との相性について改めて考えるということもなくなってしまいうだろう。和文英訳と自由作文の間には、様々な種類の制限作文がある。これらには絵や図を用いた作文も含まれるが、以下ではそれ以外のタイプを紹介する。

A: 文完成テスト

次の文の下線部を補って、クラスメートに本を紹介しなさい。

This is the book which _____.

B: 単語補充テスト

次の単語をそのままの順番・そのままの形で使い、必要な単語を補って、1文を完成しなさい。ただし全部で8語とする。

photo, taken, famous, photographer
(解答例: The photo was taken by a famous photographer.)

C: 文補充テスト

次の文章の空所を補って、あなたの将来の夢について書きなさい。ただし、空所には文を2つ以上入れてもよい(ここでは、スペースの都合で空所を1行分しかとっていないが、書かせたい分量をイメージして行を設定するとよい)。

I want to be _____. Why?
First, _____.
Second, _____.
Third, _____.
So, I want to be _____.
Thank you.

特定の文法事項が使いこなせるかどうかを見るには「文完成テスト」や「単語補充テスト」、談話構成能力を見るには「文補充テスト」が適しているだろう。様々なタイプのテストをうまく取り入れることで、多様なライティングの能力が見えてくる。

4. 書く目的, 相手, テキスト・タイプ

自由作文にも問題がないわけではない。自由作文は、生徒に「自由に」書かせているのだから、何も悪くないように思える。しかし、たとえば「あなたの好きな本について書きなさい」というようなテストがあるが、このような文章を書くことは現実生活ではほとんどないだろう。なぜこのような文章を書くのかが明らかになっていないからだ。現実生活では、目的もなく何かを書くということはほとんどない。また、このテストでは、誰に向けて書くのかということも明らかになっていない。誰に向けて書くのかわからなければ、何を書くかを定めることは容易ではない。さらに、これは手紙なのか、メールなのか、それ以外のものなのかも明らかになっていない。私たちはこのような「真空状態」で文章を書くことはないのである。

上のような自由作文も、「アメリカにある、あな

たの町の姉妹都市の中学生に、あなたの好きなアニメを紹介するメールを書くことになりました。好きなアニメは何か、どのようなところが好きかなどについて、なるべくたくさん書きましょう」とするだけで、だいぶ違って来るだろう。

5. ライティング・テストの採点方法

ライティング・テストの採点は、大きく「減点法」「全体的採点」「分析的採点」の3つに分けられると言われている。このうち、中学校のライティング・テストの採点で最もよく用いられているのが、減点法だろう。これは出題方法と密接な関係があると言えそうだ。というのは、テストのほとんどが和文英訳であるために、全員が基本的には同じ内容を英語にしており、間違えたところを減点していくという方法がよく機能するのである。

ただ、この方法を自由作文の採点に持ち込むと様々な問題が生じる。そのうち最も大きな問題は、たくさん書けた生徒の点数が少ししか書かなかった生徒より低くなってしまふことである。自由作文では書けば書くほど誤りを犯す可能性が高くなるからだ。したがって、基本的には自由作文のようなテストには「減点法」は用いない方がよいだろう。

となると、自由作文の採点は「全体的採点」か「分析的採点」によることになる。「全体的採点」は、ABCDや5段階などの段階評価であるが、それぞれのレベルがおおよそどのような特徴なのかを書いた level description を大まかでもいいので持っておいた方がいい。単なる印象でつけていると、いつの間にか採点がぶれ、信頼性は低くなってしまふ。

これに対して「分析的採点」は、「内容」「構成」「語彙」「文法」「綴り等」というような観点ごとに別々に評価する。このため、信頼性が高く、生徒にどこがよくてどこが悪かったのかを伝えることができるので、フィードバック機能も高いとされている。ただし、この採点法をとるには、ある程度の長さの文章が書かれていないと意味がない。非常に限られたサンプルから、生徒のライティング力を分析的に見ることになるからだ。また、当然のことながら、「分析的採点」において立てる観点は、指導目標を反映したものでなければならない。